

July 2015

京都大学総合博物館 ニュースレター



京都大学子ども博物館 (4 ページに関連記事)

館長就任に際して.....	2
着任のごあいさつ.....	3
学生とモノがつなぐ大学と社会「京都大学子ども博物館」.....	4
「青空子ども博物館 in 円山」を開催しました.....	5
分野間合同研究発表会.....	6
研究資源アーカイブ通信 京都大学演習林関係資料.....	6
総合博物館日誌 (平成 27 年 4 月～6 月).....	8

館長就任に際して



2001年に日本史資料を担当する助教授として着任して以来、総合博物館について多くのことを学んできました。特筆したいのは、収蔵庫で管理される260万点を越える学術標本資料の豊かさだ。たとえば、植物標本は、新種記載の証拠であるタイプ標本を数多く含むことで知られ、京都大学を意味するKYOという名は、それらを所蔵する機関として、世界中の植物学者の間で広く通用している。昨年秋に開催した「地の宝」と題する展覧会では、愛媛県市ノ川鉱山でとれた輝安鉱など、世界的にも希有な鉱物標本のまばゆい美しさが、人びとを魅了した。また、日本の大学で初めて考古学講座を設置した、その伝統を象徴するように、文化史の収蔵庫には、日本古代史研究の基準資料となる数々の考古遺物が収蔵されている。

これら学術標本資料の大半は、まだ交通が不便だった時代に、京都大学の教官が、日本、そして、世界中をかけめぐって集めてきたものである。また、こうして集めた資料を未来に引き継ぐために、多くの関係者が奔走し、力を尽くしてきた。総合博物館の北棟は、文学部の、南棟は、理学部、農学部、工学部、総合人間学部、薬学部の教官の尽力の結晶である。

総合博物館の収蔵品は、大学における研究・教育のために収集されてきた。博物館は学生の学びの場であるとともに、日々研究者が訪れ、新たな発見を重ねている。そして、研究を積み重ねる中で、これら学術標本資料には、大学のための資料というだけでなく、広く社会に対して魅力的な発信のできる標本が数多く含まれることもわかってきた。近代以降の京都が、甚大な自然災害や戦災に遭わなかった歴史も幸いして、特色ある貴重な標本が残っていることも特長だ。

文化史、自然史、技術史の分野にまたがる総合博物館の多様なコレクションのことを知るにつれ、これらは、地球世界の成り立ちや人類史をひもとくかけがえのない資源であると確信するにいった。京都大学がこれまで集めてきた学術標本資料を守り、活用し、未来に伝えること。これこそが、総合博物館に与えられ

た最も重要な使命であると感じている。

ところで、前館長の野照文教授は、この6年間、社会と大学とをつなぐ取り組みを精力的に進めてきた。その一つに、子ども博物館というプロジェクトがある。毎週土曜日、ロビーにブースを設けて学生・院生が各自テーマを選び、来館する子どもや保護者に伝えるというものだ。初対面の小さな子どもや保護者を相手に、学生たちは、自らの研究をいかにわかりやすく伝えるかに工夫を凝らす。一見子どものためのプログラムであるようでいて、実は、学生たちが、対話を通して、自らの研究を客観的に見つめ直す貴重な場となっている。

野照文教授が、府や市を巻き込んで繰り広げてきた一連の取り組みに共通するのは、対話の存在である。野照文教授は、小学生からシニアまで、学生や研究者など、さまざまな立場の人が集い、対話する場としての博物館を目指した。標本を含め、大学が持つ知的資源を分かち合い、参加者はそれぞれのレベルで、知的な刺激を受けることのできる博物館である。こうした取り組みの中から、新たな研究が芽生え、若い知性が育ちつつある。

情報発信、説明責任など、近年、大学は、外の世界とつながることを求められている。こうしたかけ声の下で行われる活動は、ともすると一方通行になりがちだ。しかし、総合博物館は、今後も、大学と社会とが双方向でつながりあう場であり続けたい。異なる知性と感性との交錯は、知的営為を深め、創造する力を育むにちがいない。

総合博物館の教員は9人。研究機関として、膨大な学術標本資料を維持し、研究する活動と、社会に開かれた窓として、大学を社会とつなぐ活動とを、バランスよく進めるには、総合博物館の組織はあまりに小さい。困難も少なくないが、スタッフ皆で知恵を絞って、研究者にとって、社会にとって、魅力ある博物館でありたいと念じている。

(京都大学総合博物館長 岩崎奈緒子)

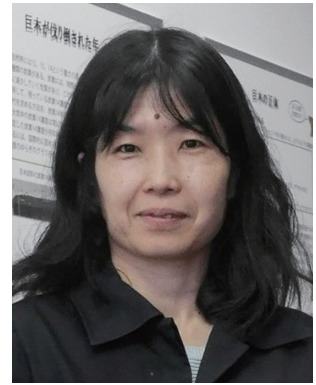
着任のごあいさつ

基礎資料調査系・准教授 村上由美子

4月より考古学担当の准教授となりました，村上と申します。私はこれまで，遺跡で出土した木の道具や木材の検討を通して，昔の人々の生活や環境との関わり方を研究してきました。木製品という研究対象の特性上，植物学や森林生態学，年輪年代学，古気候学など，自然科学のさまざまな分野とも連携することが必要で，文理融合の総合研究に何度か関わる機会にも恵まれてきました。博物館は，研究の面にとどまらず，多様な意味で「総合」を実践していくことのできる場です。総合博物館に着任して3か月が経ち，大学の改革や博物館本館改修に向けての資料の移動準備など，じつに多くの課題に直面している現状に接するなかで，微力ながら少しずつ着実に取り組んでまいりたいと考えています。

昨年度，総合博物館では企画展「学問の礎を受け継ぐ—文科大学陳列館からの出発—」を開催しました。総合博物館の前身である陳列館の創設100年を記念したこの企画展において，私も弥生時代の木製品とその石膏模型の展示・解説を担当させていただきました。展示準備を進めるなかで，考古学研究室の先輩方のご尽力によって貴重な資料が大切に保たれてきた歴史を知ることができました。そして展示を通じて京都大学で行われてきた調査研究の営みに新たな光を当てるという総合博物館の仕事に，大きな意義と手ごたえを感じた次第です。

総合博物館が所蔵する考古資料は，国内の大学博物館でも屈指の規模をもつコレクションとなっています。膨大な資料の移動準備を行う過程で，その全貌を可能な限り把握し，いつでも再検討に耐える状態に保つことがきわめて重要となります。次の100年に向けて，貴重な資料を受け継ぐことの重みを実感しつつ，日々の作業に向き合う所存です。



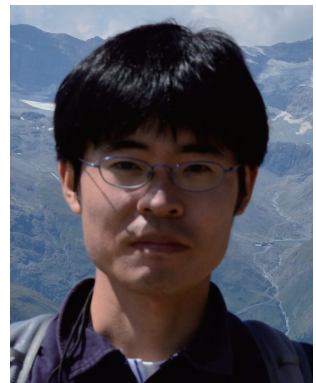
基礎資料調査系・特定助教 網島 聖

4月1日より，京都大学総合博物館の特定助教に着任しました網島 聖です。文化史部門が収蔵する地理学関係資料（地図，古地図，民族資料類）の管理を担当いたしております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は地理学を専攻し，3月までは京都大学大学院文学研究科で大学院生をしておりました。大学院では，歴史地理学の立場から，近代の都市と産業化のつながりに関心をもって研究を進めて参りました。具体的には，都市内部の同業者町という伝統的な産業集積がどのように発展したのかを，内部の同業者達の関係に注目して検証してきました。これにより，ともすれば都市の形態に関心が偏りがちであった従来の歴史地理学研究に対して，実際に都市に住んでいた人々の営みや社会的側面を重視した研究を行うことができたと自負しております。

これまでの研究を通じて，私は地図等の資料に関する知識や技術を身につけてきました。これまでに得たものを活かしつつ，さらに日々研鑽を重ねることで，総合博物館の地理学関係資料を後世により良い形で残しつつ，現代の社会や研究者の総合博物館収蔵資料に対するニーズにも十分お応えできるように努力していきたいと思っております。

ところで，私は院生時代から子ども博物館スタッフとしても総合博物館でお世話になって参りました。そこでは，共に活動する様々な分野の学生・院生との交流を通じて，研究に対する文・理の垣根を越えた広い視野の重要性を学びました。また，複雑な研究の内容をわかりやすく伝えることの難しさや面白さも学ばせていただきました。こうした経験を活かし，総合博物館の多様な研究・アウトリーチ活動にも貢献していきたいと思っております。もちろん，子ども博物館のスタッフも継続して務めておりますので，どうぞよろしくお願いいたします。



学生とモノがつなぐ大学と社会

「京都大学子ども博物館」

総合博物館のエントランスでは、毎週土曜日に小学生の家族連れと大学院生が、化石をはじめとする標本や資料をはさんで、にこやかに対話している場面を見かけることができます。この風景は「京都大学子ども博物館」というイベントが実施されているところです。「大学で大学院生と小学生の家族連れが会話を楽しんでいる」少し不思議な風景について紹介します。

「京都大学子ども博物館」とは？

「京都大学子ども博物館（以下、子ども博物館）」は毎週土曜日にエントランスで、10時00分～閉館まで開催している大学院生を中心としたスタッフがおこなっている対話型解説イベントです。

土曜日になると約6名のスタッフが人数分の長机を配置し、各自が研究に使用している標本や資料を長机に並べてお客さんが来るまで待機しています。お客さんが標本に興味を持ち「これは何？」とスタッフに話しかけたら、イベントの開始です。プログラム内容や話す順番は特に決まっておらず、お客さんの反応を見ながら、話を進めていきます。2時間近くスタッフと話し込む人もいますが、数分でその場を離れてしまう人もいます。午前中は比較のお客さんは少なく、ゆったりとした雰囲気です。活動をおこなっていますが、13時00分過ぎから閉館までは家族連れで大変にぎわっています。

「子ども博物館」のプログラム内容は、対応するスタッフによって異なります。現在25名がスタッフとして登録しており、月に約1回のペースで参加をしています。スタッフは、大学院生を中心に構成しており、所属は、理学、文学、薬学、人間・環境学、農学、工学など多岐にわたっています。

参加者は、小学校低学年の家族連れが最も多いですが、対象年齢は特に設けていません。子どものような好奇心を持った大人も歓迎しています。「最初は子どものため」と思って（子ども博物館に）参加したけれど、気付けば自分の方が夢中になっていた」という保護者の声をよく聞きます。お客さんの中には、最初はどのように参加したらいいのか分からず、戸惑っておられる方もおられますが、慣れてくると「次は化石のお兄さんとお話がし

たい！」「今日は昆虫の人はいますか？」という質問もいただきます。

スタッフとの話題は、研究や標本のことだけではなく「お兄さん、お姉さんとお話すること」自体を楽しんでいる子どももいます。中には数年通ってくれているリピーターもいます。新入りスタッフよりも「子ども博物館」事情に詳しく、少し緊張しているスタッフに対して「ここではどんなお話ができますか？」と積極的に話しかけ、スタッフをフォローしてくれるつわものもいます。

「出張博物館」の開催

「子ども博物館」は総合博物館での毎週土曜日の活動だけではなく、京都府教育委員会などの依頼を受けて、「出張博物館」という名称で「子ども博物館」を開催しています。「子ども博物館」を開始した2004年9月から2015年3月末までに京都府下を中心に49回おこなってきました。また、毎年5月5日の「こどもの日」にちなんで5月5日前後には円山公園音楽堂にて「青空子ども博物館 in 円山」を開催しています。

スタッフにとっての「子ども博物館」

「子ども博物館」での人気のプログラムが、最初から人気プログラムだった訳ではありません。初めてスタッフとして参加をするために気合いを入れて準備した標本や内容が、実際におこなってみると子どもの評判が悪くて活動終了後にはがっかりしているスタッフや、説明することに熱中してしまい、無意識のうちに専門用語を多用しているために参加者が少し唖然としている姿を見て、我に返って反省をするなど、学生にとって試行錯誤をする場所になっています。

また、「子ども博物館」での経験を通して「伝える」職業についた卒業生もいます。「子ども博物館」に参加し始めた頃は、お客さんとあまり上手に話すことが出来なかったスタッフが、少しずつ人と会話することに慣れ、教職に興味を持ち教員になった卒業生、「子ども博物館」での経験を評価され博物館で学芸員として働く卒業生や出版業界で活躍している卒業生もいます。

大学院生にとって自分の専門分野以外の方と話をする

ことは、自分の研究分野に対する世間のイメージを知り、世間では誤解されていること、今の自分に欠けている知識を客観的に捉えることに役立ちます。また、話をする相手に合わせて使用する単語や言葉を選び、その分野に対する相手の興味や知識量を考慮して伝える訓練ができ

る場所になっています。

「子ども博物館」が、これからも大学院生と来館者のみなさんが自然に会話ができる場所になればと思っています。
(総合博物館特定研究員 中川千種)

「青空子ども博物館 in 円山」を開催しました

2015年5月6日(水・祝)に円山公園音楽堂において「青空子ども博物館 in 円山(以下、青空子ども博物館)」(共催:京都大学総合博物館・円山公園音楽堂事務局)を開催しました。このイベントは、5月5日の「こどもの日」にちなんで行っている「京都大学子ども博物館(以下、子ども博物館)」の拡大版です。2008年から毎年行っており、今年で8回目の開催になります。連休前の天気予報では、6日の予想は雨だったのですが、当日は天候に恵まれタイトルに負けない青空でした。また、イベント開始30分前からこの日を心待ちにしていた参加者で会場はにぎわっていました。

「青空子ども博物館」では、通常の「子ども博物館」プログラムだけではなく、ゲストを迎えて特別プログラムを実施しています。過去には歌手の深川和美さんによる童謡サロンや、京大相撲部による演武と相撲ミニレクチャーをおこないました。今年も、大野照文教授(古生物学)による「三葉虫ミニレクチャー」を実施しました。

大野教授のあいさつと化石についての簡単な説明の後、参加者には、三葉虫の化石が配られました。大野教授からの質問に対して、参加者は、配られた化石を熱心に観察し、観察した結果をもとに推理した自分の意見を積極的に発言していました。

「青空子ども博物館」の恒例イベントである「紙ヒコーキ大会」も実施しました。音楽堂のステージから参加者

が客席に向かって一斉に紙飛行機を飛ばし、その飛距離を競います。「紙ヒコーキ大会」は2回おこない、各回上位3名が表彰され、ミュゼップ(京大博物館ミュージアムショップ)から副賞が提供されました。

通常の「子ども博物館」からは、人気のある「イルカのはなし」「へびのはなし」「お絵描き相談室」「えれめんトランプで遊ぼう」「多面体をつくろう」「勾玉をつくろう」「折り紙で遊ぼう」「世界の国々と国旗」など10のプログラムを実施しました。

「青空子ども博物館」の参加者には「子ども博物館」ファンやこのイベントを目的に参加された方だけではなく、会場の前を偶然通りかかって参加した人もおられました。その方々からは「(京大博物館で)こんなイベントをしているとは知らなかったので、今度はゆっくり博物館に遊びに行きたい」「京大博物館の近くは通るけど、入ったことはないの、近いうちに遊びに行きます」などの感想をいただき、「子ども博物館」や「京都大学総合博物館」について、広く一般の方に知ってもらえる機会になりつつあります。また、学生時代に「子ども博物館」のスタッフとして活躍していたOB、OGもいます。「青空子ども博物館」は、「子ども博物館」の現役スタッフとOB、OGとの交流の場にもなっています。約100名の参加者で終始にぎわい、休日の午後のひとときを過ごしました。
(総合博物館特定研究員 中川千種)



青空子ども博物館 in 円山「紙ヒコーキ大会」

分野間合同研究発表会

2015年5月15日、総合博物館3階講演室にて、昨年度に引き続いてSPIRITSの一環として分野間合同発表会が開催された。本年度は博物館構成員に新メンバーの4名を迎え、岩崎新館長の就任と博物館の体制も変化したことを受けて、各々が自分自身の研究について紹介する形で、17名の発表が行われた。

ここでは、新メンバー4名の方についてその演題とその内容の一部を紹介する。

栗田和紀 特定研究員は、「琉球列島とその周辺地域におけるトカゲ属の分類と進化史」という演題にて、分類学・集団遺伝学・生物地理学的アプローチから主にトカゲ属（トカラ列島）に棲息するトカゲの進化史についてであった。

小泉 都 学振PD研究員は、「ボルネオの狩猟採集民の民族植物学」という演題にて、分配の価値観を共有するボルネオの狩猟採集の言葉を収集・分析し、狩猟採集民における名前の多様性について取り組んでいるという内容であった。

村上由美子 准教授は、「木の考古学から分かること—縄文巨木の謎にせまる—」という演題にて、博物館1階ロビーにて現在展示中の京大北部キャンパスより発掘された縄文時代の巨木について考古学から新たに分かったことを紹介された。

網島 聖 特定助教は、「産業化の歴史と産業集積の役割」という演題にて、地理学的アプローチから同業者町である大阪の道修町を事例に産業の集積化について話された。

このような内容からも多種多様な分野の方が異なる視点に基づき、他の分野の方にも理解してもらえるように心を砕いていることが窺い知れた。また、岩崎館長の閉会の挨拶にもあったように、同じ総合博物館に属するメンバーの個性を知ること、異なる分野でも共通する問題・関心の持ち方と自身の専門分野だけでは得ることのできない発想の違いを知ることができ、学際的な研究が生まれる場となるのではないかと考える。

このような発表会を定期的に設けることによって、今年度採択された融合チーム研究プログラム—SPIRITS—「大学博物館国際共同研究で復元する東アジア交流史：ネズミからマリア十五玄義図まで」をはじめとして、総合博物館の研究・教育活動がより活性化するとと思われる。

（日本学術振興会特別研究員 丸山啓志）

研究資源アーカイブ通信

京都大学演習林関係資料：故吉村健次郎助教授の16ミリフィルム

フィールド科学教育研究センター(略称フィールド研)の倉庫には、旧農学部附属演習林の事務書類にまじって、ガラス乾板写真、紙焼き写真、映像フィルムなどが残されている。京都帝国大学が基本財産林として台湾演習林の移管を受けたのは1909年、農学部附属演習林が発足したのは、農学部設置の翌年である1924年であった。2012年度、研究資源化プロジェクトに採択され、まず台湾演習林の写真と、劣化の恐れのある16ミリフィルムからデジタル化を始めた。台湾演習林の当時の植生を記録するガラス乾板写真や、マラリアの特効薬であるキニーネの原料となる規那（キナ樹）栽培の様子を記録し1940年に「天覧」された写真帳などを、研究資源アーカイブで公開することができた。1930年に撮影された

樺太演習林の航空写真197枚は、2014年度にデジタル化され、近日公開する予定である。その他、芦生研究林や瀬戸臨海実験所など、フィールド研の9施設にも貴重な資料が残されており、順次、広く活用いただけるようにしたいと考えている。

16ミリフィルムを残された故吉村健次郎助教授は、1989年、現職のまま62歳で亡くなられた。そのため、研究室に残された資料のうち、廃棄するには忍びないと考えた関係者が、フィルムや写真を事務室管理の倉庫にひそかに残したのであろう。日記やノートなどは見つからないため、刊行されている文章と写真の撮影日付や撮影場所などから、先生の足跡をたどることとなった。

公開しているコレクションの分類に示すとおり、

1970年から6年がかりで進められた知床半島の映像記録が、もっとも重要なものと思われる。自然破壊の進む前の姿を記録したいと、特に高山植物の分布を記録しつつ、重たいボレックスの16ミリフィルムのカメラで撮影を続け、6回にわけて稜線を縦断した。その途上、遠音別岳附近でシレトコスミレの群落を発見している。

クマ生態研究は、林学者としてクマハギの被害を防止するために始められたもので、クマの好む臭いを調べるため、1981年に岐阜クマ牧場、白浜のサファリパークで反応実験をしている光景が映像で記録されている。

1980年6月に今西錦司先生が北海道の羅臼岳などを登山する映像も残されている。学生時代に京大土山岳会に所属された吉村先生が随行し撮影したものである。

29巻、4時間10分の映像からは、科学者の眼による記録映像としての確かさだけでなく、実直で人間味あふれる吉村先生の雰囲気を感じ取ることができる。1970年に、野兎研究会（現在の森林野生動物研究会）の設立準備会が京大演習林本部で開かれたのも、1978年、京都大学の野生物研究会が発足したときに顧問となられたのも、吉村先生の世話好きが学問的展開のエネルギーとなった証かもしれない。研究資源アーカイブで学問的な資源を公開することによって、多くの関連情報が寄せられることを期待したい。同時に、懸命に生きた学者の志を伝えるものとなることを願っている。

（京都大学フィールド科学教育研究センター
企画情報室 技術班長 榎田 盤）

※写真は、いずれも公開映像から静止画をキャプチャーし色調補正したものである。

京都大学研究資源アーカイブ
<http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>



知床の川を遡上する吉村先生ほか（1970-07-08 ルサ川か）
（標題：リール大 02, 知床半島 観光編・登山編 18:31）



岐阜クマ牧場における反応実験（1981-07-14）
（標題：リール大 01, ヒグマ研究会 1977 Apr. 18:31）



今西錦司先生の山頂での万歳三唱（1980-06-22 斜里岳か）
（標題：リール中 07, 今西先生 知床の山を行く 12:44）

<参考文献>

- 吉村 健次郎. 知床半島と私. 林（北海道林務部監修・北海道造林振興協会発行）. 1972年9月号～1973年2月号, 1975年10月号.
- 吉村 健次郎, 福井 宏至. ニホンツキノワグマによる森林の被害と防除に関する研究：クマハギ被害の実態と樹皮に含まれる α -pineneに対するクマ類の反応について. 演習林報告（京都大学農学部付属演習林）. 1982, 54, p. 1-15.
- 吉村 健次郎. 知床半島, 遠音別のシレトコスミレ：その分布と個体数. 北方林業. 1983, 35(8), p. 230-233.
- 今西錦司全集 別巻 年譜・主要著作目録・総目次・登頂一五五二山山名リスト. 講談社, 1994.
- 榎田 盤. 京都大学樺太演習林を1930年に撮影した航空写真. 外邦図研究ニューズレター 2014, 11, p. 15-25.
- 榎田 盤. 1940年京都帝国大学国策科学の天覧. 文書館だより（京都大学大学文書館）. 2015, 28, p. 4-5.

総合博物館日誌（平成 27 年 4 月～6 月）

展示

実施日	名称	講師
2月11日(水) ～4月12日(日)	企画展 第29回日本医学会総会2015 関西 医学史展 「医は意なり一命をまもる 知のあゆみ」	
4月12日(日)	関連企画 医学史サロン「学問の中心京都」	酒井シヅ（順天堂大学 名誉教授）
2月18日(水) ～4月19日(日)	特別展 「文化財発掘—京大キャンパス出土の埴輪—」	
4月5日(日)	関連企画 ギャラリートーク「京都大学出土の古墳時代資料について—展示解説とともに—」	伊藤淳史（京都大学文化財総合センター 助教） 富井 眞（京都大学文化財総合センター 助教）

イベント

実施日	内容	講演者
5月6日(水)	青空子ども博物館 in 円山	
5月11日(月)	総合博物館ナイトミュージアム 京都・大学ミュージアム連携関係教職員および関係部局の 事務職員を対象とした、常設展示、企画展、特別展の解説	
5月15日(金)	京都大学総合博物館 分野間合同研究発表会	総合博物館教員・研究員
5月24日(土)	京都千年天文学街道・第20回アストロトーク 講演「ビッグバンの残光発見から50年」 4次元宇宙シアター「3Dメガネで見る宇宙のすがた ～火星のお話～」	作花一志（京都情報大学院大学 教授） 青木成一郎（理学研究科附属天文台）
6月15日(月) ～12月5日(土)	第4回京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー	

レクチャーシリーズ

実施日	内容・テーマ	講演者
5月9日(土)	no. 134 しゃぼん膜の不思議を探ろう	種村雅子（大阪教育大学 准教授）
6月13日(土)	no. 135 ヒエログリフで数学を	三浦伸夫（神戸大学大学院国際分科学研究科 教授）

博物館セミナー

実施日	内容・テーマ	講演者
5月15日(金)	第67回 明治期の洋画との出会い	鈴木美智子 （総合博物館 研究資源アーカイブ 教務補佐員）
6月12日(金)	第68回 Montane mammals, conservation challenges, climate change: consequences of forest degradation	John L. Koprowski (Professor of Wildlife Conservation School of Natural Resources and the Environment University of Arizona U.S.A)

その他

4月11日(土) 皇太子殿下下行啓

入館者数

7,272名（うち特別観覧 36団体 2,221名）

発行日 2015年7月24日

編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>